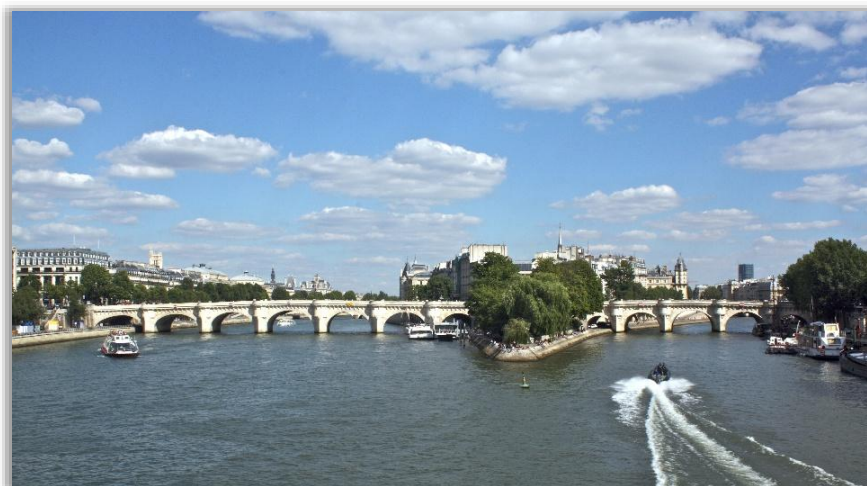


世界遺産『パリのセーヌ河岸』 印象派の描いたポン・ヌフ(セーヌ川に架かる橋) ～ピサロとルノワールの作品から見る大改造後のパリ～



セーヌ川を見ないとパリに行った気がしないのは、私だけでしょうか。数えきれないほどの名所・旧跡がセーヌ川沿いにあり、このセーヌ川沿いを歩いて巡るだけでも、パリを代表する場所を訪れることができます。エッフェル塔、ルーヴル美術館、オルセー美術館、ノートル・ダム大聖堂などです。これらの名所の多くは、世界遺産『パリのセーヌ河岸』の登録範囲に含まれています。その名が示す通り、セーヌ川あつてのパリの世界遺産です。しかし、この「セーヌ川に架かる橋」は、あまり注目されていないのではないのでしょうか。そこで今回は、この「セーヌ川に架かる橋」をテーマにしたいと思います。パリ市内には、「セーヌ川に架かる橋」は 37 架あります。その中から、世界遺産の登録範囲に含まれる、押さえておきたい3つの橋をご紹介します。

■セーヌ川に架かる3つの橋

・ポン・ヌフ

1578 年に建設が始まり、1604 年頃に完成した、パリに現存する最古の橋として知られています。重厚な造りが印象的で、パリを象徴する橋のひとつです。ノートル・ダム大聖堂のあるシテ島の西端に位置し、セーヌ川の兩岸を繋いでいます。その美しい姿は多くの画家たちを魅了し、ピサロ、ルノワール、アルベール・マルケなどによって描かれています。



ポン・ヌフ

・アレクサンドル3世橋

1900 年のパリ万博に合わせて建設されました。豪華な装飾が施され、頂上には金色の彫像が輝きます。ロシアとフランスの友好を象徴する橋として知られています。大規模展覧会の会場として利用されるグラン・パレやプティ・パレと、ナポレオンのお墓がある「アンヴァリッド」を結ぶ橋としても、知られています。幅は 40m もあり、とても開放感のある橋です。



アレクサンドル3世橋

・ポン・デ・サール

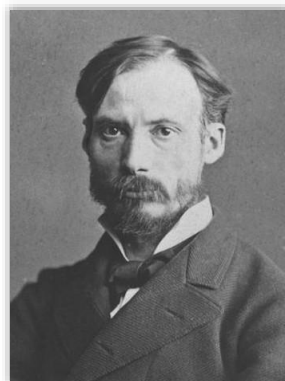
「芸術橋」とも呼ばれ、ルーヴル美術館とフランス学士院の間に架かる歩行者専用の橋です。車は通ることができません。アレクサンドル3世橋とは対照的に、とても、こぢんまりとした橋で、観光客に人気のスポットです。1801年から建設され1804年頃に完成した最初の橋は、船の衝突によって損壊し、1979年には一部が崩壊しました。現在の橋は、1984年に再建されたものです。



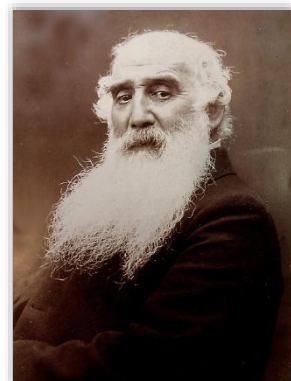
ポン・デ・サール

■ルノワールとピサロ

今回ご紹介したいのは、印象派の巨匠ピエール＝オーギュスト・ルノワール(1841年～1919年)とカミーユ・ピサロ(1830年～1903年)が描いた、「ポン・ヌフ」の作品です。このふたりの画家は、同じ印象派に属しながらも作風が異なるため、作品を比較されることは、それほど多くありません。ルノワールが比較されることの多い画家は、モネ。ピサロはシスレーでしょう。いずれも印象派を代表する画家で親交はとても深く、シスレーはモネやルノワールを誘って、フォンテーヌブローの森にスケッチによく行っていました。印象派の画家たちの「題材」は、主に風景です。パリ近郊やセーヌ川沿いの街や村を多く描いています。



ピエール＝オーギュスト
・ルノワール



カミーユ・ピサロ

チューブ入り絵具の普及によって戸外制作が容易になったことや、パリ郊外へと鉄道が開通したことが、主な要因です。20代から30代にかけて、彼らが取り組んだ題材には共通するものがありました。しかし、歳を重ねるにつれて、ピサロは「点描画」の習得や「都市風景」を題材に、モネは「光と影」の描写へ、ルノワールは「微笑ましい人物像」へと、その関心対象は分かれていきました。一方、シスレーは風景画を中心とするスタイルを変えずに、モレ・シュル・ロワンの街やその周辺の風景を、たたひたすら描き続けました。このような背景を踏まえて、ピサロとルノワールがそれぞれ描いた「ポン・ヌフ」の作品を観ていきましょう。

■ルノワールの描いた『ポン・ヌフ』

ピサロより先に描かれた、ルノワールの「ポン・ヌフ」の作品からご説明します。夏を思わせるような、明るい作品ですね。当時31歳、第1回印象派展の開催(1874年)される2年前の作品です。パリの市街地は、1850年代から約20年にわたりセーヌ県知事のジョルジュ・ウージェーヌ・オスマンによって進められた「パリの大改造」によって、都市景観が大きく変化しました。この作品は、そうした新しくなったパリを描いた、貴重な1枚なのです。パリは近代都市へと発展し、世界中の都市計画に影響を与えました。そして、この「パリの大改造」が、1991年の『パリのセーヌ河岸』の世界遺産登録に繋がっていきます。



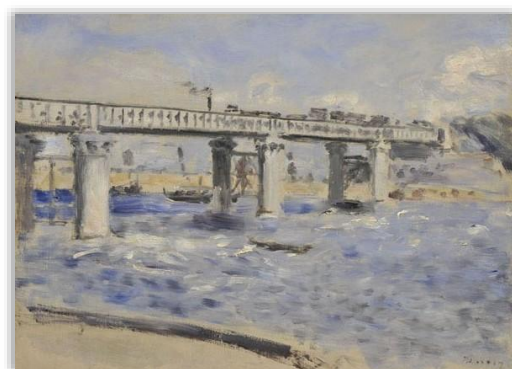
『ポン・ヌフ』ピエール＝オーギュスト・ルノワール
1872年/ワシントン・ナショナル・ギャラリー

この作品に描かれている、華やかに着飾った人々や行商、馬車などからは活気を感じられ、刷新されたパリを行き交う人々の様子が窺えます。画面手前には、手を繋いで歩く母子と思われる姿も描かれています。幼い子どもを描き加えるところに、ルノワールらしさを感じます。さらに、たなびくフランス国旗と流れる雲が、画面全体に躍動感を与えています。しかし、描かれた当時の時代背景を見ると、1870年に普仏戦争でフランスはプロイセンに敗北し、1871年にはパリ・コミュンによる激しい内戦が起こるなど、新しく生まれ変わったパリの街も戦火に見舞われました。この作品は、まさにその復興が始まった頃に描かれました。大改造されるまでのパリは、画家が筆を取りたくなくなるような街ではありませんでした。ルノワールは、大きく姿を変えたパリの街並みを、「新しい題材」として描きたかったのでしょう。明るい陽射しと夏を思わせる雲、そして、光溢れる希望に満ちた都市の姿を描いたのです。

■“青の使い手”ルノワール

本作品に限らず、一般的にルノワールの作品の特徴として挙げられるのは、ビリジアン、ピンク、ブルーなどの色を薄く塗ることです。乳白色も使われています。完成した作品には、深みを感じさせるというより、ソフトな色合いが感じられます。それこそが、ルノワールの持つ色彩感覚ではないでしょうか。ルノワールの画風は、時代とともに変化していきましたが、この色調は生涯を通じて一貫しています。ルノワールは、画家になる以前、磁器の絵付け職人として働いていました。彼の色彩感覚はその延長線上にあり、新古典主義やロマン主義の画家たちとはまったく異なる、独自のものといっただいでしょう。この作品は、ルノワールが31歳の時に描いた作品です。特筆すべき点は、「ブルー系」の見事な使い方です。効果的に用いることで、爽やかな印象に仕上がっています。「ブルー系」の色は使い方を間違えると、暗くなったり濃すぎてしまったりします。他の印象派の画家たちも「ブルー系」の色を好みましたが、ルノワールは最も優れた“青の使い手”だと思います。

たとえば、1873年に描かれた『アルジャントゥイユの橋』をご覧ください。セーヌ川の水面や空などに用いられたブルーが、とても美しい。そして、雑念を感じません。実際にこの作品は、モネに誘われて、モネが選んだ場所と同じ場所から鉄道橋を描いています。その一方で、描き切らないような表現が、自身の求めている題材とは異なっていたのか、途中で放棄したような感じも受けます。しかし、そのことが逆に作品に勢いを与えています。無駄なものを描かず、良い色合いだけを残したかのような、ピュアな魅力を持った作品です。『アルジャントゥイユの橋』は、ルノワールが“青の使い手”であることを物語る、傑作のひとつだと思います。



『アルジャントゥイユの橋』
ピエール＝オーギュスト・ルノワール
1873年／上原美術館



『ポン・ヌフ』カミーユ・ピサロ
1902年／ひろしま美術館

■ピサロの描いた『ポン・ヌフ』

ピサロの色彩の特徴として挙げられるのは、薄いピンクや薄紫色などを配色し、あえて筆致を残すことで、重厚感のある作品に仕上げています。細かく描き過ぎず、大胆な筆致により作品に迫力が生まれています。この作品が描

かれたのは、1902年。ルノワールが「ポン・ヌフ」を描いた30年後にあたります。橋を行き交う馬車や人々からは、当時のパリの活気が感じられます。後方に見える建物も、区画整備された後に建築されたもので、とても新鮮な印象を受けます。30年の歳月を経ていることもあり、ピサロの作品の方が建物も多く、都会的な雰囲気です。この橋を渡って左に曲がったところが、ルーヴル宮(ルーヴル美術館)です。時代背景は、ベル・エポック。1900年にはパリ万博とパリ・オリンピックが開催され、アール・ヌーヴォー建築が隆盛を極めていた頃です。ルノワールが描いた頃とは、大きく異なります。エッフェル塔も既に、1889年の完成から13年経っていました。

ピサロは、時代とともに、その作風を変化させていった画家です。初期の作品では色調を抑えて、どこことなくシスレーを思わせる作風が見られます。しかも、題材にも共通するものが多かったため、どちらが描いたのか区別がつきにくい作品もあります。また、ピサロは、1874年から1886年まで計8回開催された「印象派展」のすべてに出品した、唯一の画家でもあります。一時期、点描画に傾倒する時期もありましたが、点描画ではピサロ本来の良さが十分に発揮されないものと、本人も感じていたのでしょう。晩年の作風には、初期の頃の抑えた色調に重厚感を持たせた仕上がりになっています。「色を抑えて描く」ことこそが、印象派の原点のひとつです。抑えた色調を保ちながら、そこに重厚感を与えること——。これが、ピサロが辿り着いた最終地点だったのではないかと、私は考えています。

■ルノワールとピサロの作品の比較

作品には、ふたりの作風の特徴がよく表れています。ルノワールの作品は、ご覧の通り、晴天を描いています。それに対して、ピサロは曇り空を描いています。パリの建物は、クリーム系や黄土色系の色調が多いため、同系色でまとめられたピサロの作品には、どこか落ち着きを感じます。曇り空の方が、パリの街並みの色彩には合います。逆に躍動感を与えるのが、晴天を描いたルノワールの作品です。水の色にも、ふたりの観察力が示されています。水は空の色を投影します。空が青ければ水も青、空がクリーム色であれば水もクリーム色。ふたりとも、そのように描いています。「水は青いもの」という固定概念にとらわれず、よく観察して描いているところは、さすがです。ルノワールは、画面全体をとても明るい色調に仕上げています。この“はっとする”ような色遣いには、モネの影響も感じられます。さらに、大きな違いがあります。それは、ふたりが描いた方向が逆であることです。ルノワールは北から南へ、ルーヴル美術館がある北側からシテ島方面を描きました。それに対して、ピサロは南から北へ、シテ島からルーヴル美術館がある北側方面を描いています。なぜその方向性が分かるかという点、ルノワールの作品では、画面右側にアンリ4世像が建っています。また、影の向きからも推測できます。ピサロの作品の場合は、画面左上部にサン・ジェルマン・オーセロワ教会が描かれています。こうした建物や光の向きを手掛かりにすると、ふたりがまったく逆の方向からポン・ヌフ周辺を描いたことが分かります。ルノワールの作品は、先にも述べましたが、春から夏をイメージさせるパリ、ピサロは秋から冬をイメージするパリが感じられます。街行く人々の服装や空の色からも、そう判断できます。パリの象徴とも言える、エッフェル塔が完成したのは1889年です。それ以前と以後では、ふたりの描いた時代も大きく異なります。31歳でこの作品を描いたルノワール。まさに画家としての未来を期待される時期です。それに対して、ピサロの作品は72歳の時に描かれ、既に自身の画風が確立していました。印象派を代表するふたりの巨匠が、時代の転換期に、それぞれの眼差しで移り行くパリを描いてくれたことは、たいへん貴重です。今でも、ポン・ヌフ周辺の風景は、あまり変わっていません。彼らの作品を見比べながら現在の風景を眺めると、時代を超えて繋がっているパリの姿が見えてくるようです。



『ポン・ヌフ』アルベール・マルケ
1904年／ひろしま美術館



アルベール・マルケ

最後に、アルベール・マルケ(1875 年～1947 年)の作品(1940 年)をご覧ください。ピサロの作品から約 38 年後に描かれたポン・ヌフです。ピサロの作品に描かれているのが馬車であるのに対して、マルケの作品には自動車が描かれています。行き交う自動車が時代の流れを感じさせてくれます。この作品は、ピサロの作品と同じ向きで描かれています。正面の建物はサマリテーヌ百貨店で、現在もほぼ同じ姿をとどめているため、位置関係が一目瞭然です。アンリ4世像は、ルノワールの作品とは反対側に描かれています。同じポン・ヌフという橋を、時代を隔てて、巨匠たちが描いているのはとても興味深いことです。

今回は、ピサロとルノワールの作品を、時代背景とともに見てきました。巨匠たちが、現代の世界遺産登録エリアを年代ごとに、「時代の生き証人」のように描き遺してくれたことになります。これは、たいへん貴重なことではないでしょうか。『パリのセーヌ河岸』の世界遺産登録には、オスマンによる「パリの大改造」を経て、それまで中世の面影を色濃く残していたパリ市街の景観が大きく変化し、パリが近代都市へと発展していったという背景があります。そして、その都市計画は、世界各地の都市計画のモデルとなりました。その大改造後のパリの姿を、「ポン・ヌフ」というパリを象徴する橋を通して、ルノワール、ピサロ、そしてマルケが、それぞれの時代に描き遺してくれたのです。『パリのセーヌ河岸』の世界遺産としての価値を考えた時、こうした画家たちの作品もまた、後世へと残すべき遺産と言えるのではないのでしょうか。

沼田政弘